

No.149
2005.
11.31

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111
振替名古屋637909

博物館の「もの」と過去の情報の発信

中部学院大学教授 木下 康彦



昨年、学生を引率して県博を訪れたとき、マイ・ミュージアムギャラリーで、明治・大正・昭和のSPレコード展が開催されていた。今の学生にとってはSPレコードが珍しいものであることは想像できた。しかし、展示を見ながら、学生達に「LPは知っているだろうがSPはね・・・」とふと漏らしたところ、「LPって何ですか」と聞き返され驚かされた。考えて見ると彼らが物心ついた時代はすでにCDの時代、LPを知らない世代なのである。

変化や変動の激しい時代、古い世代の生活経験や文化は新しい世代に伝えられず次々と過去の時間に置き去りにされていく。博物館は過去の「もの」を収集、調査研究、保存することで過去の記憶を凍結する。「もの」は大切に保存されることで過去のままの姿を止めそのイメージを保つ。「もの」はその中に多くの過去の情報を秘めている。しかし、博物館を訪れる新しい世代は「もの」の表面の姿を見るが、「もの」の中に凍結された情報のすべてを知るわけではない。博物館の学芸員、教育普及員の解説で「もの」に凍結された情報は解凍し、いきいきと過去を語りはじめる。

考古学的遺物、歴史的資料・遺物など専門的学術研究により、解き明かされなければならないものもある。しかし、古い世代が生き、経験してきたことでも、語り伝えていなければ、新しい世代には全く未知のものも多い。

アフリカのある社会では人間を3つの範疇

に分類するそうである。今、生きている者、既に亡くなったが今生きている人と時間を共有した生ける死者(サシャ)、生前を誰もが知らなくなった古い死者・先祖(ザマニ)である。サシャは生存者の記憶の中に生き続けており、その姿を心の中に呼び起こすことができる。しかし、ザマニはことば、文書、遺物を通じてしかイメージすることができない。明治以前の人々は今の日本人にとってザマニであり、明治の人々の多くはサシャである。

一昨年、県博の特別展で「昭和、くらしの歩み」(昭和30年代を中心とした)という展示があった。40~50代以上の人々にとってこれらはサシャとしての生きている過去であり、30代以下の人々にとっては経験のないザマニとしての過去である。

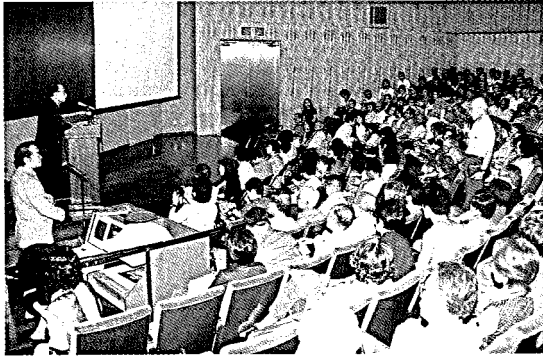
そこに展示されていた数々のくらしの「もの」は特に50代以上の人々にとっては、見るだけで古い記憶が次々と甦ってくるものであった。しかし、20代の学生にとって、何に使われていたのかわからない「もの」も沢山あったようである。例えば「やぐら炬燵」、炭を扱う道具など。

私たちは世代から世代へと語り継ぐべきものを多く持っている。しかし現代のような変化の激しい生活の中では、古い「もの」は次々と捨てられ、語り継ぐ媒体としての「もの」が個々の家庭では消えていく。

博物館は過去の記憶を再現する媒体としての「もの」を多く保存している。歴史や過去の語り継ぎにより、我々は個々人の人生を越えた長い時間、歴史を生きていくことができる。博物館の「楽しみ」は単なる娯楽でなく、そうした「時間や記憶の発信」である。

第104回岐阜県博物館協会公開講座報告

演題：「パーク・コレクションの香り」
日時：平成17年7月18日 14:30～16:00
場所：岐阜県美術館 ハイビジョンホール
講師：東京大学・多摩美術大学名誉教授
辻 惟雄氏
参加者：250名



写真：岐阜県美術館提供

岐阜県美術館で開催された「日本の美 三千年の輝き ニューヨーク・パーク・コレクション展 縄文から琳派、若沖、広重まで」記念講演会として、展覧会監修者であり、岐阜県に在住されたこともある辻惟雄氏が講演されました。

海外の日本美術コレクションの概要やパーク夫妻が日本美術に傾倒された経緯、御自身との交流などのお話に続き、50点余の作品についてスライドを使用しての解説があり、当展覧会の作品選定に対する監修者としてのこだわりを伺うこともできました。

パーク財団は、縄文土器から近代までを対象とし、特定分野に偏らない、海外の日本美術一大コレクターです。戦後に収集が始められたにもかかわらず、その質の高さと量の豊富さを誇り、今回の展示品全116点の中には、20年前に東京国立博物館他で開催されたパーク展で出品された122点に含まれなかった作品が69点も、出品されました。また、鎌倉の仏師として名高い快慶の作になる彫刻など、日本にあれば重要文化財の指定を受けてもおかしくない、という名品も含まれています。

辻氏は、こうした美術品が海外に存在することにつき、「日本美術は日本人だけのものではない。優れた文化の存在が海外に認められる、ということは異文化交流の点からも意義深いことである」と締めくくられました。(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 稲川由利子)

第105回岐阜県博物館協会公開講座報告

演題：「秀衡の仏像寄進と義経逃避行」
日時：平成17年9月3日 13:30～15:00
場所：カルヴィライとしろ
講師：白石博男氏
参加者：60名

今回の講座は、大自然のドラマいっぱいの地奥美濃の秘境「カルヴィライとしろ」(郡上市白鳥町石徹白)にて開催されました。交通不便の標高700mの高地でもあり参加を心配しておりましたが、60名を越す出席にて用意された70畳の和室が一杯となる盛会となりました。

今回の演題は平成17年NHK大河ドラマ「義経」に関連し、加えて義経の生涯と奥州への逃亡の経路の問題について、鎌倉時代史の根本史料「吾妻鏡」九条兼定の日記「玉葉」「平家物語」等の貴重な史料をもとに、くわしく講義されました。平家での戦いで際立った指揮振りを見せながら、頼朝の怒りを買って逃亡しなければならなかった悲運の英雄、義経がどのルートを通して平泉へ逃げたか、800年後の今完全に解明することは困難ですが、「吾妻鏡」には義経は奈良から伊賀に行き山伏の姿で伊勢、美濃を経由したと記されており、美濃から長滝石徹白を経て北陸に抜け奥州に渡ったという程度の大ざっぱな経路を推定することが出来ると思います。

このルートが一番重要な鍵を握るのが、平安時代末期奥州藤原三代秀衡が白山の麓石徹白の地に寄贈した銅像虚空蔵菩薩坐像(国重要文化財)であると思います。

秀衡、義経ゆかりの地石徹白で熱のこもった白石講師の楽しい実り多い講演もアツという間に予定の時間となり、時間不足を感じながら終了となりました。



続いて杉木立と石段の続く大師堂に場所を移して、大師講 上杉修一氏より特別解説をお聞きました。そして直接御案内戴き、銅像虚空蔵菩薩坐像を身近に参拝すると共に、悲運の英雄義経が歩んだであろうとされる義経ゆかりの道をしのびながら解散しました。

(機関紙委員 日本土鈴館 遠山一男)

第62回岐阜県博物館協会会員研修会報告

期 日：平成17年9月8・9日
場 所：下呂温泉旅館会館等
参加者：15名



「博物館と観光」というテーマで2日間にわたって会員研修会が行なわれた。1日目は下呂温泉旅館会館において次の3つの講演があった。

最初は「下呂発温泉博物館の建設構想と目的」について同館館長の川上裕惟氏に、次に「下呂発温泉博物館開館後の運営状況と動向」について同館の武川光雄氏にお話をお聞きした。下呂発温泉博物館は、温泉を科学と文化の両面から紹介する全国でも数少ない温泉の専門博物館として昨年春にオープンした。お二人には、下呂温泉に限定せず幅広く全国の温泉を紹介する展示、充実した体験コーナーや情報コーナー等、温泉旅行者に必ず足を運んでもらえる施設にするための運営・展示上の工夫等について話をしていただいた。

3つめの講演は、飛騨高山まつりの森の糸田尚氏による「リピーターの確保への取り組み」についてであった。バリアフリーへの対応、来館者への挨拶の徹底、アンケートによる来館者の要望等の把握、本格的な伝統文化の紹介、外部への積極的な情報の発信等の取り組みのほか、他の観光施設とのセットプランを企画して旅行業者へ提案する等の実践例の話も伺うことができた。リピーターの確保については、多くの博物館の関心の高い問題でもあり、活発な質疑応答がなされた。

講演終了後、下呂発温泉博物館を見学させていただいた。

2日目は下呂市内の下呂温泉合掌村、ふるさと歴史資料館・峰一合遺跡公園、禅昌寺・禅昌寺歴史民俗資料館の見学が行なわれた。

宿泊を伴った本研修会は、会員どうしの情報交換や親睦を図るという意味でも非常に有意義なものであった。

(岐阜県博物館 池上 尚)

第106回岐阜県博物館協会公開講座報告

演 題：「歌麿、国芳。どっちの美人画？」
日 時：平成17年10月10日 13:30~15:30
講 師：名古屋市美術館学芸課長
神谷 浩氏
場 所：中山道広重美術館
参加者：33名

第106回公開講座は、中山道広重美術館（恵那市）の開館四周年記念特別企画展「名古屋テレビ所蔵 美人画一春信、歌麿から夢二、深水まで」の記念講演会を兼ねて開催された。



講師は、名古屋市美術館学芸課長・神谷浩氏。神谷氏は、名古屋テレビ所蔵の浮世絵コレクションについて、整理分類、目録作りなどの基礎作業から携わってきた経緯があり、今回の中山道広重美術館での展覧会も、氏にお骨折りと助言を頂いている。いわば展覧会のオブザーバーとしての出講である。

神谷氏はまず、演題「歌麿、国芳。どっちの美人画？」の意味を説明し、固定観念による作品鑑賞の弊害を指摘した。

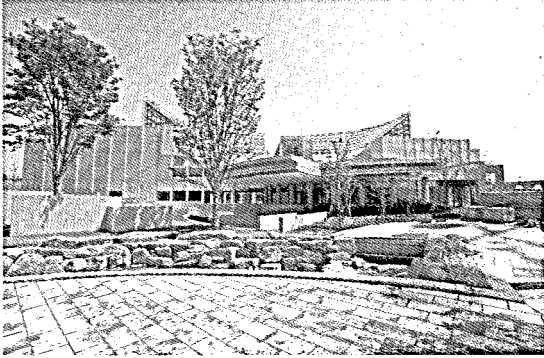
次に、誰もが「美人画と言えば」思い起こす喜多川歌麿の作品を紹介。一般に“歌麿顔”と総称される歌麿美人画様式だが、年齢や立場、場面、感情によって描き分けられている事を指摘した。一方、「武者は国芳に限れり」と評される武者絵の確立者・歌川国芳の美人画を丹念に確認。勇壮な武者絵に可笑しみを誘う風刺画・戯画、合理的な視覚で描かれる風景画、と幅広い画域の中にある国芳美人画の特徴について、時代背景を踏まえながら語った。

そして「どちらの美人画が素晴らしいのか」という問いではなく、「どちらの美人画にどんな特徴があるのか」「どちらの美人画が好きなのか」といった問いを投げ掛け、鑑賞者による主体的な作品との関わりの重要性を、改めて説いた。

(中山道広重美術館 菅原真弓)

岐阜県世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ

〒501-6021 各務原市川島笠田町1453
河川環境楽園内
TEL 0856-89-8200



2004年7月に開館した「岐阜県世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ」、淡水魚水族館としては世界最大級、淡水生物飼育展示種類も世界有数の水族館です。愛称の「アクア」は水の意味、「トト」は、小さな子供が魚のことを表現する言い方で、覚えやすく親しみがあることから「アクア・トト」の名称で地元の人々からも親しまれています。

珍しい生物として、「生きた化石」といわれているオオサンショウウオ、国の特別天然記念物に指定されている最大の両生類を見ることができます。大きな体に小さな目、愛嬌のある姿が人気です。

また、日本最大の淡水魚1.5mほどにもなる「イトウ」や、大きいものは全長3m、体重300kgにも達するタイのメコン川に生息するメコンオオナマズなどが、ゆったりと大き



な水槽内を泳ぐ姿を見ることができます。

大型淡水魚として有名な「レッドテールキャット」「ピラルクー」「シルバーアロワ

ナ」など、アマゾンに生息する人気の高い淡水魚を見るだけでなく、岐阜県レッドデータブックに掲載されている絶滅危惧種の魚類を、地元的美濃和紙の紙すき小屋を見たとた水槽を設けて紹介しているのも特徴です。

水族館は、環境共生型パーク「河川環境楽園」内に位置するため、複数の学習施設が集まって「河川環境学習ゾーン」となっています。そこで、親子で楽しく学べる学習プログラム「ポイントガイド」や「バックヤードツアー」、「アクア・スクール」なども定期的に行われています。

環境教育や地域交流の拠点として、子どもから大人までが、「木曾三川・長良川の源流から河口までの自然と世界の淡水魚」をテーマとして河川を中心とした自然環境を楽しく学び、考える場とするとともに、癒し効果のある、自然環境を再現した展示を行うなど新しい試みがなされた水族館です。



【交通】東海北陸自動車道「岐阜各務原IC」から車で約10分／名鉄「岐阜駅」から岐阜バス川島松倉行き「川島笠田」停車、徒歩で約15分

【開館時間】9:30～18:00（最終入園は17:00）

【休館日】無休（平成17年度は12/12（月）・12/26（月）・12/27（火）・1/10（火）・2/13（月）施設内の公園が閉園のため休館）

【入館料】一般1400円（1120）

中高生1100円（900）

小学生750円（600）

幼児（3歳以上）370円（300）

※カッコ内は20名様以上の団体料金

（機関紙委員 内藤記念くすり博物館 野尻佳与子）